

神戸大学 国際文化学研究推進センター 研究プロジェクト
「近現代における『神話』の史的展開と今日的意義」第1回講演会

ドイツ・ロマン派の 神話研究

“Nation” から “Volk” への推移を踏まえて

講師 **田口 武史** 氏 (長崎外国語大学 教授)

コメント **野上 俊彦** 氏 (神戸大学大学院 国際文化学
研究科博士課程後期課程)

ドイツでは、18世紀末から19世紀初頭にかけて「国民」を表す語が“Nation”から“Volk”へと変化した。すなわち、啓蒙主義の時代には“Nation”と称していた「国民」を、ロマン主義の時代では好んで“Volk”と呼ぶようになったのである。この変化は、とりもなおさず国民観の変化、あるいは「我々」意識の変化である。

同時期に神話に対する関心のあり方も変わった。従来、もっぱらギリシア神話が研究の対象とされてきたのに対し、ロマン派はむしろ北歐神話やインド神話に強い関心を示し、そこに「我々」のルーツを探ろうとした。「ゲルマン」や「インド・ヨーロッパ」という新しい枠組みに、アイデンティティのよりどころを求めたのである。

この二つの変化を照らし合わせつつ、近代ドイツにおいて知識人が神話に仮託して描き出そうとした「我々」の姿を洞察することが、本発表の狙いである。まず“Nation”から“Volk”への推移を概観したうえで、ロマン派の J. ゲレス、J. グリム、F. シュレーゲルの神話研究を具体的に検討する。

* 日時 平成29年9月3日(日) 午前10時30分

* 会場 神戸大学国際文化学研究科 中会議室 (A403)

問合せ先：清川 祥恵 kiyokawa@pearl.kobe-u.ac.jp